

新渡戸稲造における「品格」の養成

—明治末期を中心として—

森 上 優 子*

はじめに

新渡戸稲造（1862（文久2）－1933（昭和8））は近代日本におけるキリスト者のひとりとして広く知られる人物である。日本文化の紹介者、農政学者、国際連盟事務局次長、第一高等学校長や東京女子大学初代学長などを勤めた教育者など、その活動は多岐に渡る。

新渡戸は、明治40年代頃より、「田舎」や「地方」について高い関心を寄せている。その少し前の19世紀後半という時代は、「故郷」と都市がともに発見され、意識化され⁽¹⁾た時代であった。都市化が進み、農村から都市へ人口が移動し、その結果として、自分の生地や以前の居住地が「故郷」となった。新渡戸は、なぜ多くの日本人が「故郷」とするであろう「田舎」や「地方」を重要視し、注目したのであろうか。本稿では、当時の社会状況を踏まえつつ、新渡戸における「田舎」や「地方」への関心について、「品格」ということばに着目して、彼の人間観との関連から考察したい。

1. 新渡戸と農政学

新渡戸の「田舎」、「地方」への関心は、彼の専門とする研究領域であった農政学にそのひとつの原点を見出すことができるだろう。はじめに、彼の農政学者としての歩みについて概観しておきたい。

新渡戸は、1862（文久2）年、南部盛岡藩士の家に生まれた。彼の祖父である傳は、三本木原の開拓を行った人物であった。1876（明治9）年、明治天皇の東北北海道方面の御巡幸の折に、この父祖の志を子孫も受け継いで農事に励むようにという天皇のお言葉があり、新渡戸に農政学の途へと進む決心をさせた。新渡戸14歳の時のことである。⁽²⁾その後、彼は1877（明治10）年に、札幌農学校に二期生として入学した。同級生には内村鑑三や宮部金吾がいる。新渡戸は農学校卒業後の1882（明治15）年には札幌農学校予科教授（農商務省御用掛と兼務）となり、農業史や農政、農学概論の講義を担当した。⁽³⁾翌1883（明治16）年、彼は東京帝国大学に入学するも、その翌年には、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学に留学し、「土地問題（“農業経済”農政）の研究」⁽⁴⁾に打ち込んだ。⁽⁵⁾さらに、その後もドイツのボン大学、ベルリン大学に留学し、農業経済学を学んだ。

当時は、明治政府が日本における産業の近代化とともに農業の近代化も緊急の課題としていた時期に当たる。農商務省に勤務した経験を持ち、札幌農学校で教鞭をとるなど、国家機関の中核に身を置く立場にあった新渡戸は、日本の政治的方向性に呼応するかのよう、欧米において近代的農業の学問的研究を精力的に行った。と同時に、その研究基盤には、父祖の志を継承するという新渡戸の強い意志があったことは忘れてはならないだろう。新渡戸の農政学に関する主たる研究成果は、『農業発達史』（1898（明治31）『全集』第2巻所収）や『農業本論』（1898（明治31）、1908（明

*お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター客員研究員

治41) 改版) にまとめられた。⁽⁶⁾彼の農政学に関する研究についてはこれまでに豊富な蓄積を有し、『農業本論』の分析を中心に考察が行われてきた。⁽⁷⁾次に、それらに依拠しつつ、『農業本論』のなかに表れた新渡戸の人間観を、彼のクエーカー派を通じたキリスト教信仰との関連から考察していこう。

『農業本論』は、新渡戸が札幌農学校で7年にわたる教鞭を取るも病を得て辞職し、その後の静養中に執筆されたものである。内容は農学校での講義の資料であり、農業の本質やその社会的意義について、農学、経済学、歴史及び文学の諸領域から検討したものである。⁽⁸⁾蓮見音彦氏は、『農業本論』の特徴として以下の4点を指摘する。それは、(1)資本主義を肯定する近代的合理主義的な考え方、(2)農民に対するヒューマニスティックな関心、(3)国家的な繁栄の重視、(4)実証的な学風である。⁽⁹⁾この蓮見氏の挙げる第2の点が、新渡戸のキリスト者としての人間観をもっとも反映するものと考えられる。

『農業本論』第7章「農業と風俗人情」のなかに、農民の奢侈について言及する箇所がある。そこに、新渡戸の貧困に苦しむ農民に対する同情の眼差しが見てとれる。新渡戸は、多くの道徳家が、農民の奢侈について「責むるに激烈なる言語を用ふれども、農民も同じく人類なれば、美の感念もあり、虚飾をも好み、躰裁をも繕ふべきものなり」(『農業本論』『全集』第2巻p.341)とし、「農家の奢侈は特に批摘して咎むるに足らざるべし。或点より見れば、却つて彼等を奨励する所ありて可ならずや。且暮の営みに辛勞して作るものは、克く万民を蓄へども、自ら生計を立てるに甚だ辛し。豈に憫まざるべけんや」(『農業本論』前掲p.343)と農民を擁護する。ここで、新渡戸は、職種による人間の別を超え、農民を「人類」という枠組みのなかに位置付けることを試み、人間としての平等性を主張する。この点は、注目に値する。クエーカー派のいう「内なる光」の内在による人間の普

遍的な平等性がここに表れている。更に、彼は、農民の生産活動こそ他者の生存に寄与するとの認識を示し、農民の存在価値を高く評価する。それは、まさに彼らの生に対する強い肯定であった。結論を先取りして言うならば、新渡戸は「田舎」に生きる者たちの姿に高い「品格」を見出し、そこに人間としての理想的なあり方を求めたと思われる。

以上のように、新渡戸の「田舎」への関心は、父祖が行った開拓事業に影響を受け、農政学の研究という形をとりながら、育まれていった。次に、当時の日本における都市化の観点から、新渡戸が「田舎」へ関心を示した理由を探ってみたい。

2. 「都会」と「田舎」

日露戦争後、「都市」と「農村」や「田舎」との対立が顕著となり、農村の停滞、衰微が問題化した。長塚節の『土』という小説が朝日新聞に連載されたのは1910(明治43)年のことである。舞台は茨城県結城郡岡田村国生あたりであり、当時の貧農の生活が克明に描かれている。この小説は、「都会」の繁栄と「田舎」の衰退という当時の社会の現状を象徴する。

新渡戸が「田舎」に高い関心を寄せるひとつの理由もこの現状認識によるものと考えられる。「田舎が段々度外視せられるやうに成り行くのは、大いに憂ふべき事」(「地方の研究」(明治43(1910))『随想録』『全集』第5巻p.178)であり、「今のやうに東京にのみ人が集つて来る日には、田舎には老人か、墮落青年か、非職官吏位しか居らぬやうに成らう」(「地方の研究」前掲p.179)という言葉からは、当時の疎外された「田舎」の様子が浮き彫りにされる。

ここで、当時の都市化という現象について確認しておきたい。近代日本における都市化は、19世紀後半以降、日本が近代化、産業化を推進したことにより生じた。人口が農村から都市へ移動し、

都市社会が形成された。そしてそれと同時に農村社会が変容していく。特に、1890年代は産業都市が出現し、産業化が農村から都市への人口移動を促進した。さらに、20世紀に入ると、都市化は急速に進展する。成田龍一氏は、1900年前後から1935年前後にかけての都市空間の展開として、(1)大都市化の進行、(2)産業都市の躍進、(3)産業都市のネットワークの集約された空間としての工業地帯の形成を指摘する。⁽¹⁰⁾このような都市化という社会状況のなかで、「都市問題」が提出されたり、神経衰弱などの精神の疾病が流行したりした。⁽¹¹⁾次の新渡戸の言説は、この時代の特徴を如実に語っている。

時代は変移せり。牧場は区割せられ耕されて田畑となり、田畑また繞らすに垣を以てして地を製造場に譲る。牧童の笛は聞く可からず。田植の歌、連枷の音は遠く消え去り、鄙人の声は器械の響の中に日に微になりまさり、田舎の光榮は千万の煙突より立騰る煤煙の陰に隠る。
(「新年の責務」(1906(明治39))『随想録』『全集』第5巻 p.139)

産業化によっていわゆる「都会熱」がもたらされ、それが農村衰退の一因となった。新渡戸は、『農業本論』「第6章 農業と人口」において、都会に人口が集中する理由として、交通機関の発達、教育の普及、職業及び移転の自由、政治思想の普及、工業の発達、徴兵制度、農の利潤薄き事、風俗思想の都化せること、財力の都会に集中すること、田間に商工業の衰ふることを挙げる。そして、彼は、都市への人口集中を「文明社会の大勢」と認めつつ、「直ちに以て田舎の衰頹」をもたらすと指摘する。⁽¹²⁾

上の「農の利潤薄き事」とあるように、都市化とともに、「田舎」での生活は逼迫した。「田舎」、すなわち、農村では、商品経済が発展したこと

より家計費の膨張が起り、農家の過剰な人員は、口減らしや家計を補充するために出稼ぎとして流出した。この時代状況を背景として、明治40年代、新渡戸は「田舎」や「地方」を重視する言説や活動を活発化させていく。その代表的な活動として「郷土会」がある。

3. 「田舎」への関心

「地方」研究を行う「郷土会」は1910(明治43)年に結成され、新渡戸が渡欧した1919(大正8)年ごろまで継続した。⁽¹³⁾この会は新渡戸宅を中心に開催され、「毎回の話題は何れは郷村の風土沿革、産業制度、生活習慣等」⁽¹⁴⁾であり、食事をしながら議論を行ったという。主要メンバーには小田内通敏、柳田國男、牧口常三郎らがいたが、後に民俗学を大成させた柳田は、新渡戸とこの「郷土会」を通じて親交があったことも見逃せない。新渡戸自身も父祖が行った青森県三本木原の開拓に関する「三本木與立の話」(1913(大正2))や、「桜島罹災民の新部落」(1915(大正4))の報告を行っている。⁽¹⁵⁾

この会のテーマであった「地方」研究の内容については、新渡戸が行った「地方の研究」⁽¹⁶⁾と題する講演に詳しい。「地方の研究」の講演は、1907(明治40)年2月に中央報徳会において行われた。ここで、新渡戸は「地方」を「ヂカタ」と読ませ、「凡て都会に対して、田舎に関係ある農業なり、制度なり、其他百般の事に就きて云へるものにて、夫れを学術的に研究」する「田舎学」と定義する。⁽¹⁷⁾

その具体的な研究内容のなかで注目すべきは、老人に話を聞いたり、旧家の記録、随筆物、村鏡などの記録による風俗習慣についての調査である。このような材料には、「田舎」における人々の日常の積み重ねが記されている。新渡戸は、この日常の営みを人間同士の関係性から生み出されるというよりも、むしろ、人間を取り巻く生活環境か

ら育まれるものと把握する。

都会では人に接する機会が多くても此等と交際するので無い故、人も殆んど物質的と成る。田舎では牛だの、馬だの、虫だのと活きた物を多く見る。常に山水に交はると言つてもよからう

(「地方の研究」前掲 p.180)

新渡戸にとって、「田舎」とは「生命」、「活きた物」、「山水」に囲まれた空間と理解されたことがわかる。「田舎」は、都市化が進行する以前、多くの日本人が体験したであろう、自然との接触や関わりが豊富な場と理解された。新渡戸はこのような場で人間が生活することにより、理想的人間が養成されると考えた。「虫を見るとすれば、アゝ虫が動いた、是から又たどう動くだろうなどと、其行先を考へる力がユツクリと働く。即ち田舎では五感に触るゝ物が少いけれども、落ちついて性格を堅める事が出来る」(「地方の研究」前掲p.180)という。人間以外の他の生命のなかに、人間もひとつの生命として入る。この生命と生命との関わり、すなわち、自然との共生により、人間の「品格」は養成されると新渡戸は捉える。

土壌から生まれた息子娘たちよ、郷土に帰れ、“自然”に還れ。田園は諸君の帰りを待っている。枝ぶりも珍しい松は、諸君が帰るかと爪先立って見ている。高々とそびえる杉は、整列して、諸君の到着を迎え敬礼しようとしている。栗の枝は諸君に手招きしようとして風をそよぎ、レンゲ草はいと可愛げにほほえみ、ツツジは諸君のために盛装をこらしている。雀は歓迎の歌をうたい、蛙はなつかしい友を想い出でよと、聞えよがしに鳴いている。(中略)われわれは埃っぽい都会を去って、田野の間に、健康と簡素な生活を求めるべきである。(中略)品格は田舎で養われるとす

れば、教養は都会に生まれるからである。

(「田舎の美德」『随想録補遺』『全集』第21巻pp.234-235)

ここで描かれている自然は人間に親和的である。その思想の背景には、「天地偽らず。農は天地に交はること近し。故に農は偽らず。」(『農業本論』『全集』第2巻p.235)という「天地」に対する新渡戸の強い信頼があったのである。「農を営む者は天然の風光に接せるを以て、益個人の清浄潔白の念を養成助長する」(『農業本論』前掲p.310)と新渡戸はいう。彼は、「洗浄潔白」の心のあり様を、忘れてはならない日本人の「品格」として重視したのである。

新渡戸は、先述のように、「田舎」への帰帰を主張するものの、日本の産業化を否定しているのではない。彼は、「農あるが故に、商も亦其財利を通ずるを得て、天下の貨を聚め、農がある故に、工も亦其功利を作す」(『農業本論』前掲p.537)、すなわち、「鼎の三足」(『農業本論』前掲p.537)のごとく商工農の併進を説く。この状態を、近代国家の趨勢として新渡戸は認めた。

とは言うものの、彼の「田舎」への関心は高く、その根底には、当時の日本人の「品格」の問題があったと考えられる。新渡戸は、現状に満足しない。というよりも危機感を募らせていたと言つてよい。だからこそ、当時、新渡戸は「田舎」を「品格」を養成する場として再認識し、そこで生活を営む農民に、理想とする人間像を見出したのではなかろうか。彼が日本人の「品格」に危機感を募らせる原因とは一体何であったのか。次に見てみよう。

4. 「器械」化された人間

新渡戸は日本人の「品格」の衰退の原因を近代教育に見出す。彼は、明治期を「物質的知識の必要を感じる事、最も痛切なる時代」(「倫理上

教育の欠陥」(1911(明治44))『随感録』『全集』第5巻 p.302)と見做し、当時の教育が「品性の養成あるいは紳士の養成から、功利的な目的のための知的知識の習得」(『日本文化の講義』「第18章 日本における教育」『全集』第19巻 p.330 (Lectures on Japan 『全集』第15巻 所収))を行うものへと変容したと指摘する。次の言説は、新渡戸の近代教育に対する痛烈な批判である。

今日の教育たるや、吾人をして器械たらしめ、吾人よりして厳正なる品性、正義を愛するの念を奪ひぬ。一言にして云はゞ、これぞ我祖先が以て教育の最高目的となしたる、品格てふものを、吾人より奪ひ去りたるものなる。智識の勝利、論理の軽業、あやつり、哲学の煩瑣繊微、科学の無限なる穿究、此等は只だ吾人を変へて、思考する器械たらしむるに過ぎざるものなりとせば、畢竟何の益かある。

(「我が教育の欠陥」(1906(明治39))『随想録』『全集』第5巻 p.115)

新渡戸は近代教育が人間から「品格」を奪い、人間を「器械」化したと捉える。

ここで、当時の教育環境で想起されるのが、青年たちのひとつの上昇志向として機能した立身出世主義である。この立身出世は明治20年代に学歴コースを経由するものへ、また、30年代には、士族の子弟や富裕層以外の民衆の間にも浸透する思想となっていく。そして、その浸透とともに「実現可能性の停滞、減少」が生じ、立身出世主義の維持が困難なものになっていった。⁽¹⁸⁾その折の1903(明治36)年、藤村操が日光の華厳の滝で投身自殺した。これは、立身出世主義の陰りを象徴する「煩悶青年」の起こした事件であったことは広く知られる。人間を「思考する器械たらしむ」近代教育は、決して人間に精神的に充実した生を保証するものではなかったのである。

新渡戸は、「品格」の養成を教育に求めることができない当時の日本の教育状況を深刻な問題として受け止めた。そして、彼はその養成を「天地に交はる」「田舎」に求めたのである。日本が近代化、産業化する以前の多くの日本人が生活した「田舎」にこそ、近代教育が「奪」ったとされる以前の日本人の「品格」が育まれる生活環境が残されていたのである。新渡戸の「田舎」への関心は、「田舎」の生活習慣などを掘り起こす「地方の研究」へと進むが、その活動は近代教育を補完すると同時に近代教育に対する彼の警鐘の意味も込められていたのではないだろうか。

おわりに

新渡戸は、明治40年代に「田舎」に関心を寄せる一方で、修養に関する言説を雑誌に掲載したり、修養書を刊行したりするなど、社会教育活動を積極的に展開した。新渡戸は修養の目的を次のようにいう。

功名富貴は修養の目的とすべきものでない、自ら省みて屑しとし、如何に貧乏しても、心の中には満足し、如何に誹謗を受けても、自ら楽しみ、如何に逆境に陥つても、其中に幸福を感じ、感謝の念を以て世を渡らうとする。それが、僕の茲に説かんとする修養法の目的である。

(『修養』『全集』第7巻 p.30)

新渡戸は、「功名富貴」を立身出世が叶ったもののみ与えられる対価と捉え、それを否定する。彼は、都会に集積する富、立身出世という夢に敗れた者の心的挫折の克服を「修養」という心的自律に求めた。⁽¹⁹⁾この社会教育活動も修養による日本人の「品格」の養成とみることができであろう。新渡戸にとって「品格」の養成こそ、時代に翻弄され、精神が疲弊した当時の日本人を救済す

る方策とされたのである。

付記

本稿は、比較日本学教育研究センター（プロジェクト名：哲学、倫理、宗教、科学思想に関する比較思想的研究）所属の客員研究員と行っている近代比較思想研究会における成果の一部である。

註

本稿における新渡戸稲造の著作からの引用は、『新渡戸稲造全集』教文館（1969-2001）によるものとし、『全集』と表記する。

- (1) 成田龍一『ニューヒストリー近代日本2「故郷」という物語—都市空間の歴史学—』吉川弘文館1998 p.2
- (2) 『農業本論』「自序」『全集』第2巻 p.9
- (3) 北海道大学『北大百年史 札幌農学校史料(二)』ぎょうせい 1981 pp.330-331, 386, 433
- (4) 宮部金吾宛書簡 明治18(1885)11月13日『全集』第21巻 p.257
- (5) 大櫃敬史「新渡戸稲造の米国留学時代における農学研究に関する実証的研究」—ジョンズ・ホプキンス大学所蔵文書の分析を中心として—『北海道大学大学院教育学研究科紀要』第101号 2007 pp.55-67
- (6) 同時期の農政学に関する著作としては、河上肇の『日本農政学』(1906(明治39年))、柳田國男の『時代ト農政』(1910(明治43))などが挙げられる。
- (7) 主な先行研究として、小林政一「新渡戸稲造博士の農政思想」(I)(II)『山梨大学教育学部研究報告』第24号 1973(昭和48) pp.86-92、第25号 1974(昭和49) pp.105-111、蓮見音彦「新渡戸博士の農業論」東京女子大学新渡戸稲造研究会編『新渡戸稲造研究』春秋社 1969 pp.242-303、橋川文三「明治政治思想史の一断面」『橋川文三著作集3』筑摩書房1985 pp.244-287、芳賀登『日本の農本主義』教育出版センター1982、関戸明子「新渡戸稲造の「地方学」とその村落研究の思想」『奈良女子大学文学部研究年報』第34号 1991 pp.68-88、佐藤獎平、中島正道「新渡戸稲造《農商工鼎立併進論》」財団法人新渡戸基金『新渡戸稲造の世界』第19号 2010 pp.79-96などを挙げるができる。
- (8) 那須皓『農業本論』「解説」『全集』第2巻 p.717

- (9) 蓮見音彦「新渡戸博士の農業論」東京女子大学新渡戸稲造研究会編『新渡戸稲造研究』春秋社 1969 pp.242-303
- (10) 成田龍一『近代都市空間の文化経験』「序論」岩波書店 2003 p.15
- (11) 度会好一『明治の精神異説』岩波書店 2003
- (12) 『農業本論』『全集』第2巻 p.283
- (13) 柳田國男『郷土会記録』「序」大岡山書店 1925 p.1
- (14) 石黒忠篤「新渡戸先生と郷土会」『全集』別巻 p.338
- (15) 後藤総一郎監修『柳田國男伝』三一書房1988 pp.395-444
- (16) 『随想録』『全集』5巻 pp.178-185
- (17) 「地方の研究」前掲 p.178。「地方学」については、すでに『農業本論』においてその必要性が指摘されている。『全集』第2巻 pp.96-99、p.241
- (18) 竹内洋『選抜社会—試験・昇進をめぐる〈加熱〉と〈冷却〉』リクルート出版 1988 pp.148-170
- (19) 新渡戸の修養思想に関しては、森上優子「新渡戸稲造における「調和」—「修養」概念をてがかりとして—」日本思想史学会『日本思想史学』第36号(2004) pp.159-176を参照されたい。